

# 開会挨拶

関 本 照 夫

(東京大学東洋文化研究所長)

おはようございます。東洋文化研究所を代表いたしまして、皆さまに一言ご挨拶申し上げます。

このアジア古籍保全連続講演会も、毎年回を重ねて、今年で4回目になりました。おかげさまでさまざまな方にご参会いただき、声をお寄せいただき、また講師の皆さま方にお時間を割いていただき、順調に続いております。この企画は東洋文化研究所が東京大学の学内資金を得て進めている4年間のプロジェクト、アジア古籍電子図書館プロジェクトの一部として行っています。古籍電子図書館というのはアジアのさまざまな古典文献を画像化して、インターネット、オンラインで世界中どこからも全文のテキストが読めるシステムです。特にこの研究所では、中国や台湾の関連研究機関よりは少し先んじて、古い貴重な書籍の全文を公開するという形で進めております。

ただ、それだけではありません。デジタル化、オンライン公開といったことと同時に、その基礎となる紙の本をきちんと充実しなければいけません。幸い東文研は、前身である東方文化学院から数えますと、100年近い書籍収集の歴史があります。でも、まだまだ体系的に見ると欠けているものがいろいろある。そうしたものを集め、集めたものをいかに保存するのか。これもデジタル化と並んで重要です。書物というのはそれ自体が非常に貴重な文化財であるわけですが、例えば仏像などに比べて、関係者は特別な貴重な品と思っけていても、なかなか社会には理解していただけません。このプロジェクトでは、そうした書籍をいかに将来にわたって保存していくのかについて、勉強会をしたり、講演会をしたり、さまざまな具体的手段を取ったり、あるいは専門家の手に委ねて補修に出すといったことをしております。

デジタル化というのは今の時代の流れですが、紙媒体、つまり昔からの紙の本がそれで不要になるわけでは全くないということを、学内でも声を大にして言っているところです。とりわけ、理科系のすべてとは言えませんが、ある分野の先生方ですと、もうデジタル化してしまえばそれでいいではないか、何で場所を取る紙の本が要るのかというような声も時々耳にするわけです。だが、紙媒体とデジタル媒体は両輪でありまして、紙の媒体は保存しなけ

ればいけません。何といたしても、きちんと作られた紙に墨やその他のインク等できちんと印刷された本というのは、特別な高度な技術を使わなくても、細かな注意を怠らなければ、何百年、時に 1000 年ももつということが既に立証されているわけです。一方、ではデジタル媒体が 500 年後にはどうなるのですかという、誰にも答えは分からないというのが実情です。もちろんより保存性の高いデジタル媒体の開発も徐々に進んでいるとは思いますが、現状ではまだなのです。そういう中でデジタル化と紙媒体の保存という二つの作業を、この間いっしょにやってきました。

この講演会には外部からもさまざまな講師の先生方をお招きして、その回ごとにいろいろなテーマで興味深いお話を伺っております。今回は災害と保存活動というテーマです。東洋文化研究所の蔵書は幸い災害に遭ってはおられません。だが、あるいはご承知の方もいらっしゃるかと思いますが、建物が阪神淡路大震災並みの地震に直撃されたら倒壊の危険があることが 3 年ほど前に明らかになり、それ以来随分苦労いたしました。64 万冊の書籍を全部外に出さねばならない。そのスペースをどうするのか。学内の空いている小さなスペースを幾つも幾つもしらみつぶしに探してはお願いして、そこに一時移すということで、おかげさまで改修・耐震補強工事も去年の 3 月末に無事に終わりました。それから蔵書 64 万冊を元に戻すのは、ただ戻して適当に並べればよいというものではございませんので、やはり大変なことでした。それも、東文研の図書室職員の大変な頑張りや、さまざまな学内・学外の方々のご支援によって、9 月には蔵書の復帰が終わり、ようやく 10 月 1 日に一般の閲覧を再開することができ、心底ほっとしているところであります。

われわれの場合、幸い阪神淡路大震災並みの地震であれば重大な被害は受けないということころまでは来たわけですが、ご承知のとおり、1923 年の関東大震災の地震エネルギーは阪神淡路とはおよそ比較にならない巨大なものです。これからも天災はいつどこでどんなものがやってくるか分からないという中で、防災と書籍など貴重な資料の保存ということで、今日一日いろいろな方からご講演をいただきます。東文研の図書室のメンバーも、頑張っている間の経験をまとめまして、後に発表するそうでございます。

今日は多数おいでいただいて、ありがとうございました。講師の先生方、どうぞよろしくお祈りします。また、質問用紙等も用意してございますので、どうぞ会場からも活発なご意見・ご質問をお願いいたします。

以上をもちまして、ご挨拶といたします。